

6 図画工作科・美術科

天野 紳一・島谷あゆみ・重本 優紀

1 はじめに

(1) 図画工作科・美術科の基本的な考え方

図画工作や美術を学ぶということは、単に描いたりつくったりするための知識や技能を身につけることではない。様々な試行錯誤を楽しみながら自分にとって価値あるものをつくり出していく創造的なプロセスを通して感性を働かせ、磨きをかけ、さらに豊かな情操へと高めていくことにこそ、この教科の学びの意義がある。リード (Herbert Edward Read, 1893-1968) の言う「美術による教育 (Education through Art)」¹⁾ が東雲図画工作科・美術科の基盤である。

子どもたちの美的活動のエネルギー源となる「感性」の意味を改めて紐解くと、一般的には「物事を心に深く感じ取る働き。外界からの刺激を受け止める感覚的能力」などと定義される。またカント哲学の世界では理性・悟性から区別され、「外界から触発されるものを受け止めて悟性に認識の材料を与える能力」とされている。思いの発露たる「表現」と、思いを豊かにするための土壌をつくる「鑑賞」とを呼吸のように繰り返しながら感性を高めていく児童・生徒の美的な営み(図1)に対して、個々の想いや発達段階に応じた適切な場と指導を提供し、その成長を保証することが図画工作科・美術科の大きな役割の一つである。

一方で9年間の義務教育期間を俯瞰する時、「美術の教育 (Education of Art)」という側面もまた重要である。現在の教育制度では、多くの児童・生徒にとって中学3年生が美術教育を受ける生涯最後の機会となる。芸術家を育成することが目的ではないが、少なくとも児童・生徒がその生涯にわたって何らかの形で美術に親しんだり、時には暮らしを豊かにする自己表現の手段として美術を選択したりできるような基礎的・基本的な能力については、この期間でぜひ身につけさせておきたい。「美術による教育」と「美術の教育」とは決して相反する考え方ではなく、学習内容として明確に区別されるわけでもない。生活の中で培ってきた感性に働きかけ、引き出し、深めていくことで豊かな人間形成をめざす前者と、新たな知識や技能、理論などを教授することで芸術の価値そのものに迫ろうとする後者とは、義務教育9年間の児童・生徒の発達段階に応じて図2に示すようなウエイトバランスをもって展開されるものと考えている。

学習指導要領では、予測不能なこれからの社会を生き抜くために育成すべき資質・能力が「何を理解しているか、何ができるか(知識及び技能)」「理解していること・できることをどう使うか(思考力・判断力・表現力等)」「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びに向かう力・人間性)」という3つの柱に整理され、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が提言されている。東雲図画工作科・美術科がこれまで長く研究テーマとして掲げてきた「アクティブ鑑賞」の手法(美術作品への興味関心の喚起→個々の主体的探求→コミュニケーションを通じた視点の拡張)や、「ポートフォリオを活用した発想プロセスの可視化」「協働的発想・協働的創造を生み出す授業デザインの在り方」等はこのようなニーズに応えるものであり、今年度の研究も基本的にはこれまでの延長線上に位置づいている。

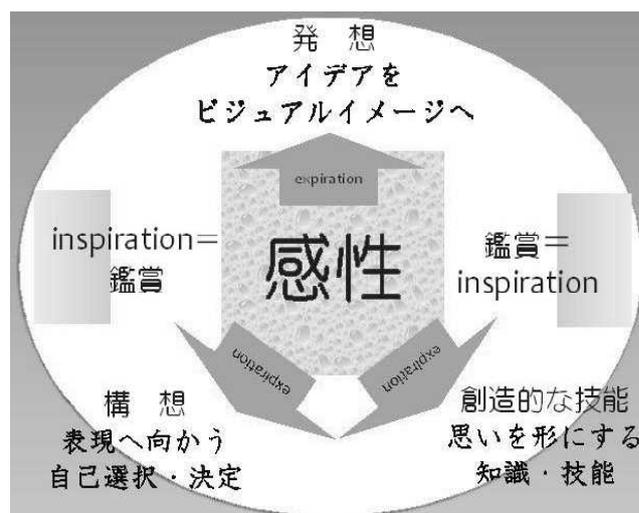


図1 感性を中心とした表現と鑑賞の関係



図2 「美術の教育」と「美術による教育」

(2) 9年間でめざす生徒像

東雲図画工作科・美術科では、9年間を通して育てたい子ども像を次のように設定している。

①自分らしい感性に基づいた美意識をもち、②身の回りのさまざまな対象や環境に主体的に働きかけながら、③生涯にわたって美的体験を享受する生徒。

①自分らしい感性に基づく審美眼とは、美しいものを美しいと感じる心のアンテナのことである。ここでいう「美しいもの」とは、児童・生徒個々の美的体験を通して醸成された感性、価値観に基づいて判断されるものである。一般的な「美」の範疇に止まらない多様性をもち、新たな体験及び他の価値観との出会い、そこで生まれる対話など、協働的な営みを繰り返しながら広がり深まるのである。

②身の回りのさまざまな対象や環境に主体的にはたらきかけるとは、「自分らしい感性」を大切にしながら、自らを取り巻く環境とそこに潜む「美」を興味をもって見つめ、見出し、主体的にかかわろうとする態度のことである。様々な素材、表現技法、芸術作品、あるいは多様な感性をもった他者と出会いながら展開される多様な造形活動の経験と、そのプロセスで展開される造形的な思考・判断の繰り返しを通して培われる。

美しいものへの憧れや表現への欲求は人が生来もっている根源的な欲求であり、それが満たされることで日々のくらしはより豊かになるはずである。多くの児童・生徒にとって美術教育を受ける機会が義務教育9年間で完結することを思えば、③生涯にわたって美的体験を享受する人間を育てることは、我々美術教育に関わる者にとって大きな命題である。

2 研究の背景

H29年版学習指導要領に見る「自分」

学習指導要領（H29年3月公示）²⁾では、中教審教育課程企画特別部会が“新たな時代を生きるために必要となる資質・能力の三つの柱”として示した（論点整理補足資料，H28年8月）³⁾「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」に対応する形で、小学校図画工作科、中学校美術科の目標が次の通り示されている（表1）。

表1 学習指導要領 図画工作科・美術科の目標

	図画工作科	中学校美術科
知識及び技能	対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解するとともに、材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的に作ったり表したりすることができるようにする。	対象・事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、表現方法を創意工夫し、創造的に表すことができるようにする。
表現力・判断力・思考力等	造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、創造的に発想や構想をしたり、作品などに対する自分の見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。	造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。
学びに向かう力・人間性等	つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う。	美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育み、感性を豊かにし、心豊かな生活を創造していく態度を養い、豊かな情操を培う。

表1に見られるように、平成29年版小学校学習指導要領図画工作科の目標では、「自分の感覚や行為」「自分の見方や感じ方」といった形で主語としての自分を示す言葉が明確に用いられている。三根は、『図画工作科における「わたし」と平成29年版小学校学習指導要領解説図画工作科編の検討』⁴⁾の中で学習指導要領解説の本文に登場する一人称「自分」に着目し、その出現数やそれに続く語の使用法等を分析した結果を次のように示している。（表2）

表2 解説「自分」の総出現数と前回比（速報値）

	平成20年	平成29年	前回比（%）
小図	270	535	198
小音	93	70	75
小国	220	358	162
中美	170	237	139

- ・小図では約2倍の増加
- ・小音では約3/4倍で小図の13%
- ・小国では約1.6倍の増加
- ・中美では約1.4倍の増加

表2の結果に対する三根の見解は次の通りである。

- H29 小図解説において「自分」の出現数（535 個）は、前回 H20 小図解説（270 個）と比べても芸術系他教科と比べても、突出していたことが特徴。（前回比 198 %）
- 「感覚や行為」「イメージ」「見方や感じ方」などが決して教師のものではなく、児童のものでなくてはならないことを強調しなければならないとの意識的・無意識的認識から「自分」が入った可能性がある。
- 新しい教育課程の図画工作科においては「自分」即ち「わたし」に対する眼差しが強調され、自分の感覚、自分の見方が重視されている。

中学校美術においてもその傾向は同様であり、解説「自分」の総出現数は前回比 139 % と大幅に増えている。三根は『図画工作科における「わたし」と平成 29 年版小学校学習指導要領解説図画工作科編の検討』の結論の中で、「H29 改訂は基本的に H20 年の枠組みの変更が中心であるとされたが、目標や内容への『自分』の導入と結果としての解説での強調によって H29 小図の教科の本質の保証が期待されるのではないか。」と述べている。そこで東雲図画工作科・美術科では、これまでの研究・実践を踏まえた上で、改めて「自分」に焦点を当てた研究テーマを設定することにした。

3 本年度の研究

(1) 研究テーマについて

図画工作科・美術科本来の魅力を活かした授業づくりに必要な教員の資質・能力とは
— アートを通じた「自分さがし」を促す授業構想の在り方を手がかりに —

教科本来の魅力と「自分さがし」

東雲図画工作科・美術科では、アートを通じた「自分さがし」を次のように捉えている。（図3）

多様な美的体験や造形活動を通して、自分の中に深く眠る「まだ見ぬ自分」を発見し、自分自身への問いかけや他者との関わりの中で自分なりの見方や感じ方を再認識する活動。

「自分さがし」とは一般的に、「アイデンティティを確立する」「人生を変えるきっかけを見つける」「自分の人生を見つめ直す」などの文脈で用いられる言葉である。平成9年6月の中教審答申『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について』では、「教育は『自分さがしの旅』を扶ける営みと言える」という表現が用いられている。つまり児童・生徒が様々な体験を積み重ね、試行錯誤を繰り返しながら自己実現を目指す人間形成の過程において、それを的確に支援することが教育の重要な使命であるという捉えである。

一方で「自分さがし」には内省的な自分と集団の中での自分の2つの側面があるとの考え方もある。図画工作科・美術科における学びに焦点を当てて考えたとき、それが学校という社会の中で展開されるものである限り他者との関わりを抜きにして考えることはできない。

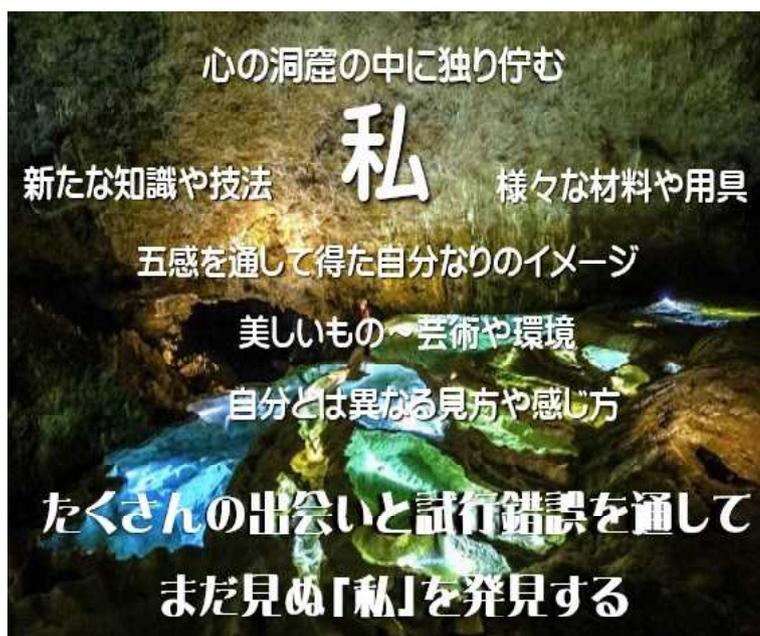


図3 「自分さがし」のイメージ

それまで特別に意識することのなかった自分の造形的な感性について、他者と関わりながら表現し、鑑賞し、振り返る学習活動を通して自分なりに意識できる領域を拡大していく。そのことによって児童・生徒一人一人の造形的な思考は深みを増し、ひいては個々のアイデンティティの確立にも寄与するはずである。このように知識や技能の習得を手段として、自ら学ぶ態度や、学ぶために必要な能力、学び方を身につけるプロセスそのものを重視する形式陶冶的な側面こそ図画工作科・美術科本来の魅力であり、「自分さがし」を促す題材開発をその魅力に迫る取り組みとして位置づけた。

9年間の学びのつながりを意識した「自分さがし」の重点

6歳から15歳までの9年間で自我は大きく発達し、変容する。したがって自我を確立していく過程にある小学校低学年から中学年（Ⅰ期）の児童と、いわゆる「同一性（自分とは何者であるかという自覚・アイデンティティ）」を発達させる小学校高学年から中学校（Ⅱ期・Ⅲ期）の児童・生徒とでは、「自分さがし」の在り方は必ず異なる。とりわけ、図画工作科の授業の経験も浅く、自己表現に用いる語彙も習得過程である小学校低学年では、自己のアイデンティティに正面から向き合うような実践が適切とは限らない。そこで、各期の重点目標を次のように設定した。（表3）

表3 各期の発達段階に応じた「自分さがし」の重点目標

Ⅰ期	<自分さがしの基盤をつくる>
	多様な造形活動を思う存分楽しみながら五感の全てを使って感じ取ったり、表現したりする経験を重ね、自分なりの見方や感じ方、表現方法があることに気づく。
Ⅱ期	<自分の見方や感じ方を自覚する>
	自分なりの見方や感じ方、表現方法を追求する活動を通して、「何をどのように表現したいのか」「そのためにどんな方法を用いるのか」を見つめ直し、自覚できるようになる。
Ⅲ期	<他者との関わりの中で自分を価値づける>
	自分なりの見方、感じ方、表現方法やその意図を、身近な他者から社会への広がり視野に入れた「自分を取り巻く環境」の中で再認識し、自分なりに価値付けをすることができる。

(2) 研究の視点と方法～授業づくりに必要な教員の資質・能力に焦点を当てて

教員の資質・能力と題材開発

図画工作科・美術科の教員として求められる資質・能力とは何かを問う時、その基盤となるのはこの教科が形式陶冶をめざすものであるという理念である。これは冒頭で述べた「Education through art」の理念とも重なるものであり、この教科の学びを通して培われ、豊かに高められた情操が児童・生徒一人一人の人間形成に何らかのよい影響をもたらすものであってほしいと強く願う。

図画工作科・美術科の教育内容は必ずしも「系統的・段階的な教授」というスタイルに囚われることなく、目標が十分に吟味されてさえいれば、目の前の児童・生徒の興味・関心やレディネスに合わせてある程度柔軟に、創造的に展開できる。つまり、教員の経験や造形的な感性、アイデア、センスといった資質・能力を活かしたダイナミックな題材開発（解釈）が可能になる。

pckと「翻案」への着目

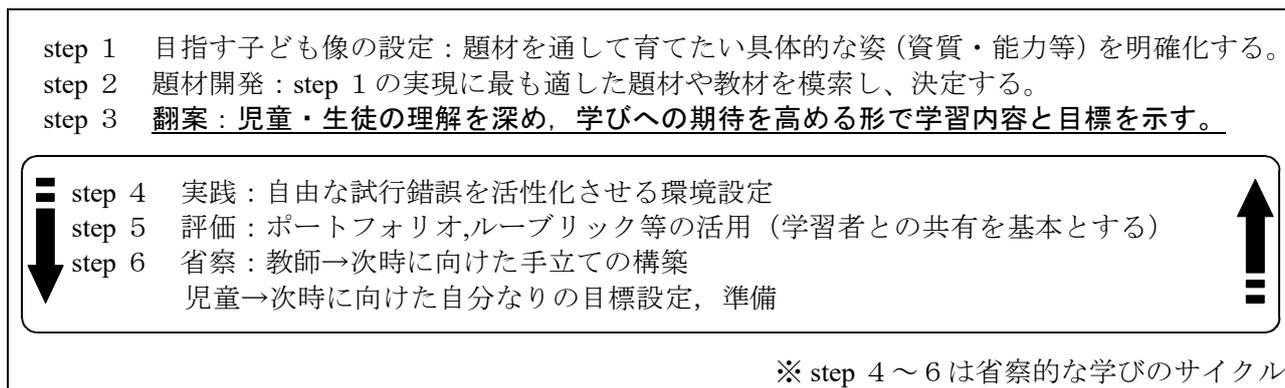
徳岡は『pedagogical content knowledge の特質と意義』⁵⁾の中で次のような解釈を示している。『pckは「教育内容」をその教授可能性から見て最も適切に具現化したものであり、「学習者の誤った先行概念」（学習者についての理解）を組み替えるのに最も有効な、また最も分かりやすい教授法を用いて教えられるものであり、具体的には「類推、表現、例、説明、実演」として学習者に提示される。（引用）』つまり pck は、「教育内容」「教授法」「学習者についての理解」の複合的な知識であり、単に「教育内容 content」と「教授法 pedagogy」についての知識が結合したものではないという捉えである。

さらに徳岡は同稿で pck の形成過程で最も重視すべきは「翻案」と述べている。『教師が理解した教育内容はそのままでは教えられない。学習者が理解できるように翻案されなければならないのである。そこで教師は、自分が理解している教育内容と学習者の思考過程との間を往復しなければならないのである。（引用）』とし、そのプロセスを次のように整理している。

- ①教材の準備 (preparation)：学習者に教えられるように教材を構造化し、分節化する
- ②表現 (representaion)：学習者が理解できるように表現を改める
- ③選択 (selection)：多様な形態から適切な教授法を選択する
- ④適合 (adaptation)：表現された素材 (教材) を学習者の特性に合致させる
- ⑤仕立て (tailoring)：適合したものを特定の学習者、あるいは一定規模の傾向・理解力をもつ学習集団を対象に仕立て直す

このような準備をもとに、実際の授業場面において省察的実践を繰り返しながら、教師は新たな包括的理解に至るとしている。これらを踏まえ、図画工作科・美術科の授業づくりのプロセスを次のように想定した。中でも、本年度は特に「翻案」の方法に焦点を当てた研究に取り組んでいく。

表4 図画工作科・美術科の授業づくりのプロセス



「自分さがし」を促す授業づくりの視点

「自分さがし」を促す授業実践にあたって特に重視したい4つの視点と、そこで必要とされる教員の資質・能力を次のように整理した。

①「自分さがし」を促す題材選択と目標設定 (翻案→授業構想力)

「自分さがし」は学習者の興味・関心に基づいた主体性を抜きにしては成立しない。したがって最も大切なのは動機付けである。児童・生徒がそれぞれ自分なりの見方や感じ方、感覚、感性を存分にはたらかせながら主体的、追求的に取り組むことのできる題材と目標を設定する。

図画工作科・美術科の学習は決められた答のない創造的、探求的な活動である。したがってその目標は常に児童・生徒一人一人に内在していなければならない。個によって、それは題材全体を通して揺るがないものになるかもしれないし、活動の過程で修正され、移り変わっていくものであるかもしれない。いずれにしても「おもしろそう」「やってみたい」という興味・関心を引き出し、「こうしてみよう」とイメージを膨らませるきっかけをつくることができるかどうかは題材の導入にかかっている。題材の概要と目標、方向性を実際の授業場面でどう伝えるのか。つまりディレクターとしての能力は、教師に求められる大きな資質・能力の一つである。

②試行錯誤を可能にする環境設定 (翻案→授業構想力/授業実践力)

児童・生徒の発想は、一定の方向性や段階に沿って生まれ、高まっていくとは限らない。身の回りの様々な造形的要素、新たな知識や技能、仲間との関わり、美術作品との出会い等に影響を受けながら、児童・生徒は自分にとって価値あるものを求めて試行錯誤を繰り返す。「つくり→つくりかえ→つくる」「気づき→気づき直し→気づく」という試行錯誤のプロセスの中でもとりわけ、「つくりかえ」「気づき直す」というエネルギーを伴う行為を容易に行うことができるような学習環境の整備と十分な時間の保障に努める。

③ポートフォリオを活用したプロセスの記録 (授業分析・評価力)

表現や鑑賞の学びの中で思い付いたこと、試しに表現してみたこと、気づいたこと、気づき直したことなどは、時間の経過とともに消えて無くなってしまふ。例えば算数科で答を求めるための思考の道筋や計算の跡をノートに残すように、造形的な思考のプロセスを記録しておくことが大切である。表現領域では、試行錯誤の中で生まれた試し描きや習作、製作途中の作品の画像、学びの過程で生まれた気づきのメモなど、鑑賞領域では、初発の思いの記録(例えば付箋等)に書き記した物、仲間と交流する中で生まれた気づきや交流のプロセスそのものが見えるようなワークシートなどが考えられる。これらを収めたポートフォリオは、「自分さがし」の重要な手がかりとなるはずである。

④学習過程に位置付いた振り返り（授業構想力／授業分析・評価力）

学習過程の途中で、あるいは終末での振り返りを丁寧に行うことで、自分自身の造形的感性に対するメタ認知を促すと同時に、それぞれの「自分さがし」がどのような形で実を結んだのか、プロセス全体を評価することが可能になる。自分は何をどのように表現したかったのか、あるいは表現しなかったのか。他者にどんな思いを伝えるために、どんな手段や言葉を用いたのか。そしてそれは伝わったのか。表現や鑑賞の学習活動と切り離された「振り返りのための振り返り」ではなく、児童・生徒自らが「自分さがし」という主体的なモチベーションをもって取り組むことができるよう、ワークシートの構成や学習形態を工夫しながら学習過程に位置付いた振り返りの場を設定する。うまくいったこともそうでなかったことも含めて自らの学びの軌跡を大切に振り返り、肯定的に評価することを繰り返しながら「自分らしさ」が培われるものと考えている。

(3) 検証方法

図画工作科・美術科では、これまで3年間取り組んできた「アートを通した自分さがしを促す授業づくり」というテーマを継承しながら、改めて実際の授業構想や実践に際して発揮される教員の資質・能力とはどのようなものかを明らかにしていこうと考えている。しかし、自らの資質・能力を客観的に評価することは困難であるため、授業構想の段階で設定した目標がどの程度達成されたのか、目標達成のための翻案をはじめとする手立てが妥当であったのか、次のような児童・生徒のパフォーマンスを通して見取っていききたい。

- 児童・生徒のアイデアシート、発言、作品等といったパフォーマンスの分析・評価
- ポートフォリオに記述された内容をもとにしたメタ認知のプロセスの分析
- 試行錯誤のプロセスや気づきの変容を記録した振り返りシートの量的・質的分析

なお、これらの評価、分析にあたっては表4の step 1 で示した児童・生徒の具体的な姿に基づいたルーブリック評価も必要に応じて取り入れていく。

【引用・参考文献】

- 1) 宮脇理・岩崎清・直江俊雄訳 (2001) 『芸術による教育』フィルムアート社, 原著 Herbert Read (1943) 『Education Through Art』Faber.
- 2) 文部科学省 (2017.3) 『小学校学習指導要領』.
- 3) 中教審教育課程企画特別部会 (2016.8) 『次期学習指導要領に向けた審議のまとめ』.
- 4) 三根和浪 (2018) 『図画工作科における「わたし」と平成 29 年版小学校学習指導要領解説図画工作科編の検討』美術科教育学会第 40 回滋賀大会発表発表概要集, p. 31.
- 5) 徳岡慶一(1995) 『pedagogical content knowledge の特質と意義』日本教育方法学会紀要「教育方法学研究」第 21 巻, p69-71.